サルトルのボードレール論

— その肖像のなりたち —

青 木 謙 三

序

サルトルの『ボートレール』[1]は多くの研究者によって実存的精神分析[2]の適用と考えられている。[3] この観点から単に形式的に判断すれば、サルトルの描きだした詩人像は理論の所産であり，よって，もし理論が正しいのなら，客観性をそなえた実像だ，という結論にともすれば達するかもしれない。

しかし具体的にこの像に目をこらすならば，ブランの指摘するごとくある種の苛立ちにおそわれ反発をおぼえるのが自然だろう。[4] 公正な判断の光に照らされた像がそこに結ばれているとは直感的に認めがたい。

実際にまたサルトルの弾劾の筆致が浮びあがらせる詩人の姿とは，すねた子供に類し，神の善なる世界に寄生して安逸な自由を楽しむサタンに比せられている：

> Orgueilleux et vaincu, pénétré du sentiment de son unicité en face du monde, Baudelaire s'assimile à Satan dans le secret de son coeur. [...] Mais qu'est-ce au fond que Satan sinon le symbole des enfants désobéissants et boudeurs qui demandent au regard paternel de les figer dans leur essence singulière et qui font le mal dans le cadre du bien pour affirmer leur singularité et la faire consacrer ?
> (BI, P. 123–P. 124, BE. P. 114)

これに反して，実存的精神分析が究めんとする本質的な対象とは，本論で述べるように，一個人が対自としての限りで投企する即自対自，世界全体を介しての我有化のあり方，神の姿のはずである[5]。したがって，実存的分析の援用であり，客観性を保つと期待され，かつ父なる神の姿に近ずくべき肖像が，現実には主観的な印象をあたえ父の目差しを受けるサタンの像に歪んで映ずるという事態が成立している。

ポジィティヴであると予想される像が何ゆえにネガティヴな相をおびているのだろう。神への投企という，ある意味で明るい姿が，メビウスの輪の調子で裏面にみちびかれて，サタンへの投企という暗い姿に映ずるのはどうしてか。

この小論の目的は以上のごとくねじれた面を呈するボードレールの肖像のなりたちを可知化し，それを介してサルトルと肖像との関係をも明らかにすることである。このために次の方法がとられる。

第一章では実存的精神分析の概要を調べる（§1）。またこの理論と，これと切り離しえない『存在と無』の全体とが含む問題点にふれる（§2）。

第二章で，実存的精神分析の求めるものとボードレール像との一致を示す。そして局所的に詩人の像がこの分析理論の適用であることを証する。

第三章は，第二章との矛盾にも拘らず，同じ肖像がサタン＝すねた子供である論脈をとらえる。そしてサルトルの形成する詩人の全体像が，実存的精神分析とは異なる視点にも立った屈折によることを明らかにする。

第四章において以上で行なわれた像の分析を第一章の分析結果と比較する。これらの関係をサルトルの状況及びテーマとに照らしあわせるとき，サルトルと肖像との関係が了解されるであろう。

第一章

§1　実存的精神分析の理論

『存在と無』全体に渡って人間とは対自存在であり，意識である。その限りでは人間は自らのうちに実体を持たず自由でしかない。[1)]

けれども『存在と無』の基調である一つの体系にしたがえば対自存在であるとは自由であるのみならず，即自かつ対自存在に投企することである。自由と投企とは同じひとつの事実である：

> Ainsi, le pour-soi est fuite et poursuite à la fois; à la fois, il fuit l'en-soi et il le poursuit; le pour-soi est poursuivant-poursuivi. Mais nous rappelons, [...], que le pour-soi n'est pas *d'abord* pour tenter *ensuite* d'atteindre à l'être: [...] Cette fuite poursuivante n'est pas un donné qui s'ajoute par surcroît à l'être du pour-soi. Mais ce pour-soi est cette fuite même; [...].
>
> (EN, P. 429)（イタリックはサルトルの強調，以下同様）

換言すれば，対自の出現すなわち存在投企の出現である：

> [...] que la liberté en surgissant détermine son possible et par là même circonscrit *sa* valeur. (EN, P. 652)[2)]

この見方には，あらゆる欲求（その表出である行為，サルトルにとり行為の反復である傾向）は，即自対自への投企にささえられていること，[3)] したがってそれらは，各々で独立した実体ではありえないこと，[4)] かつ，即自対自への投企とみなすかぎりで人間は全体であることが含意されている。

サルトルの実存的精神分析の概要は，以上の人間観を前提にして述べられている。

かれは，まず，ブールジェのフローベール論を引きあいに出して，経験的心理学の人間理解を俎上にのぼす。この心理学は一個人をいくつかの欲求に還元する。そしてそれらの欲求を実体とみなし考察を先に進めないで足れりとする（TN，P.643－P.644）。一人の人間という全体を多くの実体の総和とするこのような思想は第一に理論的水準でサルトルにより肯じられぬのは確かだろう。

理論的水準での批判と平行してサルトルが特に強調するのは，そのような見方が，化学の分析に違わず，個別的で具体的な一人の人間を抽象の波の中に消滅させてしまう欠陥である。[5)] ブールジェのフローベール理解に対してかれは不満を記す：

> Flaubert, [...] serait originellement un substrat non qualifié de ces désirs, [...] ou bien il se réduirait au simple faisceau de ces tendances irréductibles. Dans les deux cas, *l'homme* disparaît. (EN, P. 647)

つまりサルトルは人間解釈の価値を，その了解の具体性の程度で決定する，と言ってよい。

そこで正面に据えられるのが人間存在を存在投企（即自対自への投企）とする見解であって，存在投企こそが人間のそれ以上還元不可能で偶然な独自性を示すものとされる：

> L'unification irréductible que nous devons rencontrer, qui est Flaubert [...], c'est donc l'unification d'un *projet originel,* unification qui doit se révéler à nous comme un *absolu non substantiel.* (EN, P. 652)

Aussi ne peut-on remonter plus haut et rencontre-t-on l'irréductible évident lorsqu'on atteint le *projet d'être,* car on ne peut évidemment remonter plus haut que l'*être*, [...]. (EN, P. 652)

Chaque résultat sera donc à la fois pleinement contingent et légitimement irréductible. Il demeurera d'ailleurs toujours *singulier*.
(EN, P. 659–660)

経験的心理学の達しえない人間理解をめざす実存的精神分析は従って第一に存在投企を行なう根源的選択 (le choix originel) を確定する(比較的方法による《EN, P.656》)。そして，古典的精神分析と同じく[6]人間を絶えざる歴史化とみなし，その人間の動的な発展を捉えようと試みる：

L'une comme l'autre conssidèrent l'etre humain comme une historialisation perpétuelle et cherchent, plus qu'à découvrir des dounées statiques et constantes, à déceler le sens, l'orientation et les avatars de cette histoire.
(EN, P. 657)

これは状況の重視に通じる：

De ce fait, l'une comme l'autre considèrent l'homme dans le monde et ne conçoivent pas qu'on puisse interroger un homme sur ce qu'il est, sans tenir compte avant tout de sa *situation*. (EN, P. 657)

ゆえにサルトルの個人理解(実存的精神分析)は，一個人の根源的選択による投企が，外界とどのように弁証法を織りなすか，その歴史の可知化である。すなわちこの歴史化を了解することと個人を真に了解することとは等価である。ブールジュに対する以下の批判は，この判断にもとづいているのは明らかだろう：

En un mot, nous n'avons rien compris, nous avons vu une succession de hasards, des désirs sortant tout armés les uns des autres, sans qu'il soit possible d'en saisir la genèse. Les *passages,* les devenirs, les transformations nous ont été soigneusement voilés et l'on s'est borné à mettre de l'ordre dans cette succession en invoquant des séquences empiriquement constatées [...] mais, à la lettre inintelligibles. (EN, P. 645)

次にサルトルは個々の欲求（行為，傾向）と存在投企との係りを考慮する。両者の関係は現実界と叡知界（EN，P. 650），射影と本体（EN，P. 655）のそれであり，ある欲求（行為，傾向）は存在投企を象徴的に満足（EN，P. 652）させる手段である。<FAIRE ET AVOIR – La Possession>（EN，P. 633－P. 690）の項は，これらを具体的に納得させるためのものである。[7)]

すなわち欲求（行為，傾向）は三つのカテゴリー (FAIRE, AVOIR, ETRE) に分類され，まず FAIRE は AVOIR に還元される。何かをなすこと（芸術作品の創作，学問的認識，遊戯など）は持つことである（EN，P. 675）。次に持つこと，すなわち所有することは，世界全体，存在全体の所有に通ずる：

> Chaque objet possédé, qui s'enlève sur fond de monde, manifeste le monde tout entier, comme la femme aimée manifeste la plage, la mer qui l'entouraient lorsqu'elle est apparue. S'approprier cet objet, c'est donc s'approprier le monde symboliquement. (EN, P. 686)

そしてサルトルにとって所有とは，主を前にしたヘーゲルの奴隷の労働のように，所有者の主観（意識）がもの（即自）として自立的に存立することを意味する：

> C'est, en effet, cette synthèse de moi et de non-moi (intimité, translucidité de la pensée; opacité, indifférence de l'en-soi) que je vise et qui fera précisément de l'œuvre ma propriété. (EN, P. 665)

よって次の結論がえられる：

> Etre-dans-le-monde, c'est projeter de posséder le monde, c'est-à-dire saisir le monde total comme ce qui manque au pour-soi pour qu'il devienne en-soi-pour-soi. (EN, P. 688)

つまり以上の分析を通して，一方で FAIRE と AVOIR とが ETRE に還元され，すべての欲求（行為，傾向）が ETRE，すなわち存在投企をめざすものとして定義づけられている。[6)] また他方でこの存在投企が世界所有であることが示されるわけである。

かくしてサルトルの精神分析は，即自対自（自我と世界との所有）をもくろむ根

源的投企が，具体的に個々の欲求，行為，傾向として姿を示しつつ，いかに外界に反応しつつ歴史化するかの了解を目的とすることが判るであろう。

§2　実存的精神分析の理論とその前提とが呈する疑問点

A）純粋な超越性

精神分析は一般に神経症者ないし精神病者の治療をその実践的な目的としているだろう。そして異常と正常の区別が理念的にせよあるはずである。実存的精神分析がその名に値するならば，サルトルの興味が半ば伝記執筆にあるにせよ，この精神分析が臨床的には何を目標としているのか，この理論にとっては何が正常なのか，を問うのは自然であろう。

しかしサルトルが，いかなる人間存在も無益な受難であるとするとき（序 註5），また対自と存在投企とを等価とするとき（序，引用文），正常異常の考えはどのようにしても生まれてこないのである。換言すれば，実存的精神分析を患者に行なって，その人間の独自な存在投企のありかたを可知化したところで，存在投企が人間の現象学的本質である限り，分析は何の成果ももたらさないだろう。[1)]

確かにサルトルは，この疑問に応えるごとく，『存在と無』の末尾で存在投企からの人間の解放をほのめかしてはいる：

> Mais l'ontologie et la psychanalyse existentielle (ou l'application spontanée, et empirique que les hommes ont toujours faite de ces disciplines) doivent découvrir à l'agent moral qu'il est l'être pour qui les *valeurs existent.* [...] que deviendra la liberté si elle se retourne sur cette valeur ? (EN, P. 722)

しかし，この示唆にみるごとく存在投企から人間が解放されうるならば，または解放することが実存的精神分析の目的ならば，存在投企は人間の本質ではなくなることになる。つまり実存的精神分析の理論そのものが破綻をきたしていることになる。

この観点から『存在と無』全体を眺めると，この哲学作品が対立する二つの系に分裂していることが察知される。

一方の系は，人間の現象学的本質を純粋な超越性すなわち自由とのみ規定する。他方の系は，人間の現象学的本質を存在投企する限りでの超越性と規定する。

前者の視点に立てば人間は存在投企していてもそこから解放されるのが可能であって，本質的にはどのような行為も遂行できるだろう。「自由と責任」の項で，すべての人間は同時代の戦争に対して責任があるとサルトルが言うとき，かれはこの考えに拠っている：

> [...] il faut donc souscrire au mot de J. Romains [...] ≪A la guerre, il n'y a pas de victimes innocentes.≫ Si donc j'ai préféré la guerre à la mort ou au déshonneur, tout se passe comme si je portais l'entière responsabilité de cette guerre. (EN, P. 640)

ところが後者の視点をとれば人間は存在投企に還元される行為しかできない。存在投企という格子の中でしか自由でない。次の一文はこの考えに立つものである：

> Mais comme le desir, nous l'avons établi, est identique au manque d'être, la liberté ne saurait surgir que comme être qui se fait désir d'être, c'est-à-dire comme projet-pour-soi d'être *en-soi-pour-soi.* (EN, P. 655)

この場合人間は存在投企と無関係な戦争に対して責任はない。それどころか人と人との間は，狼対狼に喩えられるだろう。他人とは基本的に，それが叶えられずとも，私の存在投企を私の即自化を介して，自分の投企に向かって乗りこえようとする企てだからである。（EN，P. 310－P. 364）

人間の本質を存在投企から切り離して純粋な超越性とする考えは，『存在と無』のわずかな面しか占めないが，これを無視することはできない。他の個所でのこの矛盾の例を挙げる。

サルトルは実存的精神分析の説明の中で，存在投企が変更される可能性に言及している：

> Nous avons montré, dans le chapitre précédent, l'importance de *l'instant* qui représente les brusques changements d'orientation et la prise d'une position neuve en face d'un passé immuable. (EN, P. 661)

存在投企が変更される可能性を主張すること自体は，存在投企を人間の本質とする考えに根本のところでは抵触しないかもしれない。しかし上の文が指示する個所では下のごとく記せられている：

Qu'on se rappelle *l'instant* où le Philoctète de Gide abandonne jusqu'à sa haine, son projet fondamental, sa raison d'être et son être; qu'on se rappelle *l'instant* où Raskolnikoff décide de se dénoncer. Ces instants extraordinaires et merveilleux, [...] ont souvent paru fournir l'image la plus claire et la plus émouvante de notre liberté. (EN, P. 555)

この文の後にはこれを訂正するかのように意志は根源的投企を変化させえぬという記述が続く。しかしこの文自体は，たとえ議論として明言せぬまでも，感性的水準で人間の本性を自由とのみ捉えている，と判ぜられて自然である。

同様に不安 (l'angoisse) にふれて，この自由性の視点が窺われる：

Mais dès que l'entreprise s'éloigne de moi, dès que je suis renvoyé à moi-même parce que je dois m'attendre dans l'avenir, je me découvre tout à coup comme celui qui donne son sens au réveil, celui qui s'interdit, à partir d'un écriteau, de marcher sur une plate-bande ou sur une pelouse, [...]. J'émerge seul et dans l'angoisse en face du projet unique et premier qui constitue mon être, toutes les barrières, tous les garde-fous s'écroulent, néantisés par la conscience de ma liberté: [...] j'ai à réaliser le sens du monde et de mon essence: J'en décide, seul, injustifiable et sans excuse. (EN, P. 77)

ここでは存在投企の自由が，いわば完全に自由な存在投企となり，人間の本来の姿が純粋な超越性であるという主張が理論的水準でも表白されている。

『存在と無』の何箇所かが他の部分と呈する以上の分裂に，実存的精神分析も影響をうけている。この精神分析は，存在投企を人間の本質とする視点の上に展開されており，論理的にそれ自体で破綻している。ただ，存在投企から解放される可能性を考慮したときにのみ，精神分析として成立するだろう。が，その場合は『存在と無』の全体の分裂に精神分析の有効性が依拠することになる。

この分裂の事実の認識は『ボードレール』の検討の際，不可欠である。

B) 純粋な即自化

A)において人間を純粋な超越性とする視点は，存在投企のそれと矛盾していた。『存在と無』には，さらに，存在投企の視点の内部での自己矛盾の側面がある。

実存的精神分析の理論を補なう≪De la Qualité comme Révélatrice de l'Etre≫ (EN, P. 690－P. 708) の項で，サルトルは，ねばる (visqueux) ものにふれて，

それを反価値と名づける：

> [...] un être idéal où l'En-soi non fondé a priorité sur le pour-soi et que nous nommerons une *Antivaleur.* (EN, P. 702–P. 703)

反価値であるのは，ねばるものが対自の理想である価値と対立するからだろう。価値が即自対自と異なるものではないことはすでに述べた。奇妙なことにサルトルは，この即自による対自の呑みこみ，存在投企に一見逆行する事態が欲せられる場合を仮定する：

> Si le visqueux est bien le symbole d'un être où le pour-soi est bu par l'en-soi, que suis-je donc moi qui, à l'encontre des autres, aime le visqueux ? (EN, P. 706)

なるほど対自は，この反価値においては，たとえ即自に呑みこまれたとしても消滅はせずに存続しているのかもしれない。しかし，主体性の弱さの面で，即自対自を特性づける神のイメージとは隔っている印象がある。なぜなら神は主体性によりある意味で特色づけられるからである。[2)]

同様の例は，劣等コンプレックスの解釈においても見受けられる。サルトルは劣等性を選択されるものとし，かつこれを根源的投企とみなす：

> [...] notre projet fondamental qui est de nous choisir comme inférieur. (EN, P. 552)

これも反価値と等しく，世界の我有化，神への投企のイメージとはかけ離れているのは明らかだろう。Suzanne Lilar は，鋭く指摘している：

> Or il me semblait bien que se choisir inférieur, humilié, défait, ne constituait nullement ce choix qui ne se laisse réduire à aucun autre.[3)]

さらにもう一つの例を挙げることができる。反価値においては対自は即自に対して下位にあるとしても，いまだ存立しているかもしれなかった。今度の例では対自の完全な消滅が扱われている。それはマゾヒズムである。

サルトルによればマゾヒズムが欲するのは自己の主観性を消滅させる代りに，他者の自由により自己の客体（もの）としての存在が基礎づけられる状態である：

> A la limite, je projette de n'être rien qu'un *objet,* c'est-à-dire radicalement un *en-soi.* Mais en tant qu'une liberté qui aura absorbé la mienne sera le fondement de cet en-soi, mon être redeviendra fondement de soi-même. (EN, P. 446)

これは言わば自らの対他存在になりきった状態であり，即自対自の理想を具現しているかに映る。が正確にマゾヒズムが目的とするものを捉えるには，愛 (l'amour) との差違を調べなければならない。

愛の企てとは，自己の超越性を保ちつつ自己の対他存在を相手の超越性の絶対的限界となすことにある：

> Dans l'amour, au contraire, l'amant veut être ≪ tout au monde ≫ pour l'aimé: cela signifie qu'il se range du côté du monde; il est ce qui résume et symbolise le monde, il est un *ceci* qui enveloppe tous les autres ≪ ceci ≫, il est et accepte d'être *objet.* Mais, d'autre part, il veut être l'objet dans lequel la liberté d'autrui accepte de se perdre, l'objet dans lequel l'autre accepte de trouver comme sa facilité seconde, son être et sa raison d'être; l'objet limite de la transcendance, celui vers lequel la transcendance d'Autrui transcende tons les autres objets, mais qu'elle ne peut aucunement transcender. (EN, P. 435)

絶対的限界となることは，自己が即自対自の価値となることを意味する：

> L'objet que l'autre doit me faire être est un objet-transcendance, un centre de référence absolu autour duquel s'ordonnent comme purs *moyens* toutes les choses-ustensiles du monde. En même temps, comme limite absolue de la liberté, c'est-à-dire de la source absolue de toutes les valeurs, je suis protégé contre toute dévalorisation éventuelle; je suis la valeur absolue. Et, dans la mesure où j'assume mon être-pour-Autrui, je m'assume comme valeur. (EN, P. 436)

すなわち愛もマゾヒズムも相手の自由によって自己の対他存在を支えようとする点では共通している。しかし愛は，相手によって自分の超越性を乗りこえさせず，

相手の超越性を奪いかつ自らの超越性を保っている。したがって相手に対する優越性があり，超越性も失わないが故に，即自＝対自の理想に矛盾しない。これに反してマゾヒズムは相手によって一介の即自の限りで完全に超越されようとする指向である。つまりマゾヒズムは対自の消滅を企てるのである：

> [. . .] je m'acharnais au contraire à me faire traiter comme un objet parmi les autres, comme un instrument à utiliser: c'est en effet ma transcendance qu'il s'agit de nier, non la sienne.

このようにマゾヒズムの目標は，人間を即自＝対自への投企とする視点とは逆行する。マゾヒズムが解釈される ≪LES RELATIONS CONCRETES AVEC AUTRUI≫ （EN，P. 431－P. 447）においてサルトルは他人に対する具体的態度として l'amour, le langage (la séduction), le masochisme, l'indifférence, le désir, la haine (la culpabilité), le sadisme などに言及する。これらすべてが即自対自を直接めざすものでないことは明らかである。しかしマゾヒズムだけが即自＝対自の投企を否定する動きであること，同時にマゾヒズムがあたかも対自の理想を成就するかのごとく解せられている事実は留意に値する。

第 二 章
実存的精神分析としてのボードレール像

前章 §1 で実存的精神分析の目的を調べた。本章は，それとボードレール像との対応を問題とする。

A）根源的選択（投企）

実存的精神分析で述べられた根源的投企を，ボードレールに惹きおこす決定的なできごととは，サルトルによれば母の再婚である。再婚は詩人を孤独と実存においやった。ここから，<l'orgueil> ゆえに自己の他者性，独自性を実感し把握しようとする詩人の根源的選択がうまれる，という：

> Désormais, avec un emportement buté et décidé, il s'est fait un autre [. . .] il se sent et veut se sentir unique. (B1, BE, P. 21)

Mais l'enfant [...] axera toute sa vie sur la méditation stagnante de sa singularité formelle. (B1, P. 24, BE, P. 23)

この根源的選択はボードレール論においても人間一般に適用される現象学的本質として示されている：

Nous touchons ici au choix originel que Baudelaire a fait de lui-même, à cet engagement absolu par quoi chacun de nous décide dans une situation particulière de ce qu'il sera et de ce qu'il est. (B1, P. 21, BE, P. 20)

存在投企を人間の本質ととする視点によれば，存在投企することと対自の出現とは同じひとつの事実であった。（第一章，§1） ボードレールにもその言及がある：

Chancun a pu observer dans son enfance l'apparition fortuite et bouversante de la conscience de soi. (B1, P. 22, BE, P. 21)

さらに，存在投企が即自対自の理想である神への投企であることが，引用されるある小説の一文によって示唆されている：

Quelle volonté avait décidé qu'entre tous ces êtres du monde elle serait cet être particulier, Emily, née en telle année parmi toutes celles dont ce temps est fait ... Etait-ce elle qui avait choisi ? Etait-ce Dieu ? Mais c'était peut-être elle qui était Dieu . . . (B1, BE, P. 22)

かくボードレールの独自性獲得への企てとは，実存的精神分析の視点（存在投企の視点）からみた根源的選択に対応する。注目すべきは，ボードレール論においても一般論として，存在投企の視点が提出されている事実である。同じ視点に立って書かれたのが明らかな文は，上にあげた以外に次の如くである：

Chacun de nous choisit en soi-même parmi ses composants, celles dont il dira: c'est moi. (BI, P. 138, BE, P. 126)

また言説の裏に同じ視点を窺える文：

Chaque poète poursuit à sa manière cette synthèse de l'existence et de l'être que nous avons reconnue pour une impossibilité.

(BI, P. 129, BE, P. 119–P. 200)

B) 根源的選択の変容

根源的投企が現実の欲求，行為に自らをあらわしながら，いかに歴史化するかが実務的精神分析の本質的な目的であった。

『ボードレール』の前半（BI，P.17－P.126，BE，P.17－P.115）においては，詩人の根源的投企である独自性追求の諸方策の段階づけがはかられている。詩人の欲する独自性とは，すべての人間が味わう，実質をもたぬ形式的なものであるがゆえに（BI，P.22，24，BE，P.23，25），かれの根源的選択以後描かれるのは，この方策の挫折の歴史 (l'histoire de l'échec)（BI，P.32，BE，P.31）に等しい。

サルトルはこの歴史を，ボードレールのいくつかのテーマ，傾向，行為を考慮しながらも，かなり抽象的な水準で描く。それを最大限実存的精神分析にひきよせて跡づければ以下のようになるだろう。

1） 静的に自己を内観により捉える試み：

L'attitude originelle de Baudelaire est celle d'un homme penché. Penché sur soi comme Narcisse. [...] Il se regarde voir; il regarde pour se voir regarder. (B1, P. 26, BE, P. 25)

2） 明晰さをメスのごとく鋭ぎすまし，反省意識が被反省意識に対し，サディスティックにふるまい自己を索る試み：

Il exaspérera donc sa lucidité: il n'était que son propre témoin, il va tenter de devenir son propre bourreau [...]. Puisqu'ol n'a pas réussi à *se voir*, du moins se fouillera-t-il comme le couteau fouille la plaie, dans l'espoir d'atteindre ces ≪solitudes protondes≫ qui constituent sa vraie nature. (BI, P. 30–P. 31, BE, P. 29–P. 30)

3） 同じ反省＝被反省意識の関係において，犠牲者（被反省意識）の側に一体化する試み：

Par un mouvement inverse mais qui conspire au même but, Baudelaire voudra se faire sournoisement complice de sa conscience réfléchie contre sa conscience réfléxive: lorsqu'il cesse de se martyriser, c'est qu'il essaie de s'étonner lui-même. (BI, P. 32, BE, P. 30)

以上の三つの試みは基本的には反省による自己把握の方法といえる。この方法は存在投企の一環とされている：

La réflexion demeure une possibilité permanente du pour-soi comme tentative de reprise d'être. (EN, P. 200)

また(2)，(3)の独自性把握の手段は，反省機能の内部にサディスム，マゾヒズムを導きいれたものである。マゾヒズムが存在投企の視点に矛盾することはすでにみたが，ここでは被反省意識がマゾヒズムを指向し，反省意識はそのまま存立しているから，即自対自の理想には抵触しないといえる。従って，『存在と無』における対他関係を抽象的にとらえて，二人の人間の所有＝被所有関係にのみ注目すれば(2)，(3)にも存在投企の視点が援用されていると認められるだろう。

そして，これらの段階が各々挫折して次の段階に席をゆずるのは，反省による自己把握は不可能とする，存在投企の視点に由来する考えに，本質的には依拠しているからだろう：

La réflexion se borne à faire exister pour soi ce dévoilement; l'être dévoilé ne se révèle pas comme un donné, mais avec le caractère du ≪ déjà dévoilé ≫. La réflexion est *reconnaissance* plutôt que connaissance. (EN, P. 202)

三段階の方策のあと詩人には人間の条件，実存，すなわち純粋な超越性，自由の発見が訪れる（BI，P. 49，BE，P. 46－P. 47）。

ボードレールを客観的に純粋な超越性（自由）だとすること，かつボードレールが主観的にもそれを自覚すること，これらが『存在と無』の視点に矛盾することは前章の説明から疑いを容れない。

自由発見のあとの詩人の態度はサルトルによれば次のようになる。

4) ボードレールは，この自由への恐怖ゆえに，また絶対的価値創造（善悪の創

造）が自らの独自性を満たさぬ故に，価値の定まった既存の世界の中で，その善を承認しつつ悪を択ぶ：

C'est au sein du monde établi que Baudelaire affirme sa singularité.
(BI, P. 61, BE, P. 58)

具体的には他人の視線をうけて自己の悪人という独自性が構成され同時に自己の存在が正当化されることを願う：

Baudelaire réclame semblablement que l'on consacre sa singularité et que l'on la revête d'un caractère quasi institutionnel.
(BI, P. 67, BE, P. 62)

[...] faute de pouvoir atteindre en lui ce qui le rend irremplaçable, s'est-il adressé aux autres et leur a-t-il demandé de le constituer autre par leurs jugements [...].
(BI, P. 83, BE, P. 77)

この態度は実際的には自分の視線と両親などの他者の視線との同一化とみなしうる。次の一文でそう察せられる：

il réclame d'en (de sa singularité 筆者註) jouir comme les Autres peuvent le faire et cela signifie qu'il veut se tenir en face d'elle comme en face d'un objet. il souhaite que son regard intérieur la fasse naître comme la blancheur du merle blanc naît sous les yeux des autres merles.
(BI, P. 82–P. 83, BE, P. 77)

さらに他人の視線との同一化とは，分析的には，反省と，自己の対他存在に関する他者の判断との両者の活用を意味するだろう。私は，他人の目で，他者の私についての判断が生む対他存在をとらえようと反省するのである。反省によって自己把握が不可能なことはすでにみた。また他人による判断も同じく自己把握に通じないことは，『存在と無』において，存在投企の視点を前提として示されている：

Même lorsque le langage m'aura révélé qu'autrui me tient pour méchant ou pour jaloux, je n'aurai jamais une intuition concrète de ma méchanceté ou de ma jalousie. (EN, P. 334)

よってこの方策も挫折するに到る。この段階において明らかに存在投企の視点と抵触するのは，この態度がマゾヒズムだということである。ここでは矛盾の所在を指摘するにとどめる。

5) (4) の手段に不満な詩人は，この他人によって構成された自己自身に自らなろうとする：

> Mais d'un autre côté, son orgueil ne saurait se satisfaire d'une originalité passivement acceptée et dont il ne soit pas l'auteur. Il veut s'être fait ce qu'il est. (BI, P. 83, BE, P. 77)

(5) の段階が記されるや，(4) と (5) の関係は不透明になってくる。(4) はある個所では永続的なものと考えられている：

> Mais cette sévérité qui tantôt se dépouille jusqu'à n'être plus que le pur regard de Dieu et tantôt s'incarne dans un général, dans une femme vieillissante et futile, [...]. (BI, P. 77, BE, P. 72)

その場合でも，ある期間のあと (4) は (5) に道をゆずるのが自然であろう。しかしサルトルは詩人が (4) の段階を一方で行ないながら，他方では (5) の段階を行なうかのごとくに，上の引用文では表現している。(4) と (5) を同じ行為の分析した両面とすれば，あいまいさは解消するかもしれない。が，サルトルはそう明記しない。大体が (5) において，(4) で構成された対他存在に詩人が反発をおぼえるという説明は釈然としないだろう。この両義性については後に述べる。

さて (4) の段階をカッコに入れて (5) の段階のみを扱ったならば，他人の視線の中の自己の客体に意識を一致させる態度とは，対他存在と対自との単純な合一化，即自＝対自の投企の一種として認められる。そしてこの観点から見るとき次の文に何ら矛盾はない：

> il veut se créer lui-même, sans doute, mais tel que les autres voient. Il veut être cette nature contradictoire: une *liberté-chose*. (BI, P. 84, BE, P. 71)

< contradictoire > なのは，即自対自が存在投企の視点で，原理的に不可能ゆえ

と解しうる。

6) 悪を択ぶことで独自性獲得につとめる詩人は，今度は自己の明晰さを答とし，反省意識が他者のモラルを借りて被反省意識を裁くという形で，自己をつかもうとする：

> Mais si nous coulons dans la robe du juge, si notre conscience réflexive mime le dégoût et l'indignation à l'égard de la conscience réfléchie, si, pour qualifier celle-ci, elle emprunte à la morale apprise ses notions et ses mesures, nous pouvons nous donner un moment l'illusion d'avoir introduit une distance entre le réfléchi et la réflexion. Par la lucidité autopunitive, Baudelaire tente de se constituer en objet devant ses propres yeux. (BI, P. 105, BE, P. 96–P. 97)

この態度が (2) と原理的に同じなのは明らかである。ただ (2) の場合，サディストになる反省意識とは内容のない存在だったが，ここでは現実の他人のモラルを有しており，具体性がそなわっている。また (4) との差は，他人の判断に頼るか否かにあり，ここでの態度は現実の他人の判断から一歩退いた，モラルの借用はあっても意識内部で独立した行為である。これが挫折するのは言うまでもないだろう。

以上が，詩人の根源的投企の歴史である。これらの段階を互いに区別し，かつこれらの間のつながりを示そうとするサルトルの努力は，かれがある段階を説明する際，前の段階を繰りかえし，かつそれらと現在の段階を差異づけようとする姿勢にうかがわれる。多くの因果関係の表現 (< puisque [...] du moins >; < par un mouvement inverse [...] mais >; < à présent [...] une fois encore > etc...) が，このことを物語っている。

C) 全体性

実存的精神分析では，個々の経験的事実すなわち個人のテーマや傾向，特筆的な事件は存在投企にいわば積分されるはずであった。根源的投企の変容を考えた場合，個々の特性は投企の歴史化の中にその場所をみいだすべきであった。歴史化を無視すれば，個々の特性は根源的投企に還元されるだろう。これはある意味で，全体性の達成である。

サルトルはボードレール論の前半において，本章(B)で跡づけた独自性獲得の諸段階に，いくつかのボードレールのテーマ（性格，行為）を還元している。それらは詩人の反自然，明晰さ，悔恨，罪悪感，道徳，両親，孤独，裁く人，マゾヒズムなどに係っている。

後半においてサルトルは詩人の性格特性の際立つもの (les traits les plus manifestes et les plus célèbres du caractère) を静的にではあるが根源的投企によって説明しようとする。それらは詩人の反自然，労働，都会，不毛性，鉱物，人工，冷たさ，冷たい女，ダンディズム，過去，詩などに対する趣味である。

はっきり根源的投企との係りが理解されるものを挙げれば次のごとくになる。

1） ボードレールが自然を嫌うのは，自然が独自性に反するからである：

Car la nature en nous, c'est l'opposé du rare et de l'exquis, c'est *tout le monde.* (BI, P. 38, BE, P. 126)

2） これに対し，ボードレールの好むものは直接ないし間接に主観の物化の象徴である：

[...] mais le travail l'attire car il est comme une *pensée* imprimée dans la matière. (BI, P. 130, BE, P. 119)

[...] le métal et, d'une façon générale, le minéral lui renvoient l'image de l'esprit. [...] le métal le plus brillant, le plus poli, celui qui laisse le moins de prise, l'acier lui paraitra toujours l'objectivation exacte de sa Pensée en général.

3） ダンディズムも同様に説明される：

Il s'agit toujours du même effort pour se récupérer avec sa ≪ différence ≫. Se tenir, se brider, c'est faire naître sous les doigts, sous les brides le *soi* que l'on veut posséder. (BI, P. 170, BE, P. 155)

4） 過去について：

Le Passé lui offre l'image de cette synthèse impossible de l'être et de l'existence. (BI, P. 196, BE, P. 216)

5) 詩的行為について：

Il a été hanté par le desir de palper des pensées devenues choses — ses propres pensées incarnées; [...] ses poèmes eux-mêmes sont des pensées ≪corporifiées≫. (BI, P. 223, BE, P. 203)

このように多くのボードレールのテーマが即自＝対自，独自性把握の手段として分析されている。

本章 (A)，(B)，(C) で検討したように，根源的投企の確定，その変容，個々の欲求・行為の根源的投企への還元がボードレール論においてなされている。従って前半と後半の分離（すなわち根源的投企の変容の抽象性，個々のテーマの静的な投企への還元），また根源的投企の変容の過程にみられる矛盾（すなわち自由の自覚，(4) と (5) の段階の両義性，(4) のマゾヒズム），これらを無視すれば，ボードレール論を局所的に実存的精神分析の適用とみなしうるだろう。

第 三 章

実存的精神分析とボードレール像との差違

実存的精神分析の適用として『ボードレール』が捉えられるにもかかわらず，序でふれたように詩人の像は否定的な様相をおびている。そうなるには存在投企と判じうる像が，連結し完全に閉じていてはならないであろう。ネガティヴな像は，ポジィティヴな存在投企の像に開いた部分があるからこそ可能であろう。換言すればサルトルの存在投企の像提出における論理の飛躍，ないし，歪曲があると予想される。この論理的に不整合で開いた箇所 (A) から否定的な像が異なった曲面を別に形成していると考えられる (B)。[1] そして存在投企の明るい像は，この否定的で暗い像に包摂，ないし強引に内部に合成されて，全体的な像の否定性が不完全にせよ[2] 生じていると推せられる (C)。

存在投企の像の不連続な個所とは詩人による自らの自由性の発見であり，独自性所有の諸方策における (4) のマゾヒズム，かつ (4) と (5) の段階の不透明さであった（前章）。第一と第二のものは実存的精神分析（存在投企）の系にそぐわない。第三のものは，少くとも論理的欠陥を窺わせる。

これらの箇所は継起的に連なっており，全体的視野から眺めれば，自由の自覚からサタンの成立に致る過程の線上にある。すなわち実際にはネガティヴな曲面とはこれらの個所と重なっている。

自由自覚からサタンに辿りつく論脈を，存在投企の局所的見地をも含めた全体的視野から要約すれば下のようになる。

1) 自由を自覚した詩人は，非道徳的無関心の態度か善悪の創造かの岐路に立つ（BI，P.50，BE，P.47）。

2) なぜなら意識は自分自身から自らの諸法則をひきだす。意識は自分で世界を開示しなければならない（BI，P.50，BE，P.48）。

3) ところでボードレールは行為を嫌い，精神(esprit)の意味形成の力，創造力にこそ人間的価値をみていた（BI，P.52，BE，P.48－P.49）。

4) そして創造は純粋な自由である。ボードレールの人工趣味は，仮装，服飾，灯などが人間の創造力を示すことからくる。またその都市好みは大都会が人間の自由を映すことに拠る（BI，P.52－P.53，BE，P.49－P.50）。

5) このように創造力を評価するボードレールは，世界全体を意味づける価値の体系を，まずは創るはずである。なぜなら善悪の創造とは絶対的な創造であるから（BI，P.53，BE，P.50）。

6) が実際のボードレールは既成の道徳を守っていた。かれのおぼえる悔恨，罪悪感がそれを証する。人に明せぬ罪を犯していたわけでも，現実に犯したのが大罪であったわけでもない。ささいな罪のゆえに，かれは自己を責めている。つまりボードレールは断罪者を進んでもとめ死刑吏に加担する（BI，P.52－P.58，BE，P.50－P.55）。

7) この詩人の態度は，ジッドと比べれば判るように受けた教育のゆえではない（BI，P.60，BE，P.56－P.57）。

8) では何ゆえ生まれながらの創造者 (créateur-né) であるかれが，価値創造をせずに自らを指弾する既成のモラルを受けいれたのか（BI，P.60－P.61，BE，P.57）。

9) それは創造行為が，詩人の求める差違性 (différence) を成就させぬからである。創造によって自己所有は叶えられない。またボードレールは詩によって自己の像を捜したが，それに満足できなかった。よってかれは日常生活で自らの他者性を味わおうとする（BI，61，BE，P.57－P.58）。

10) それどころか創造的自由 (liberté créatrice) は，詩人に恐怖をいだかせる（BI，P.61，BE，P.58）。

11) ボードレールは反抗する人にすぎない。既成の道徳規準は言わばかれの存在理由をなす（BI，P.62，BE，P.58－P.59）。

12) 子供は一般に，長じて親の権威を否定し，自らの自由を見出してそれをわがものとする。ボードレールはこれを望まない。かれは幼児期にとどまっているともいえる（BI，P.63－P.65，BE，P.59－P.61）。

13) かれは自分を裁いてくれる人々の目差しを求める。その視線の下で安逸さと悪人という自己の独自性を味うつもりである（BI，P.66－P.82，BE，P.61－P.76）。

14) しかし他人に対して悪人という客体であるのに耐えられず，行為として悪を示し，この客体に一致しようとする（BI，P.82，BE，P.76）。

15) というのは人は客体であるとき，自己所有の基礎となる創造的自由を失なうからである。一方詩人は完全な自由には恐怖をおぼえた。よってかれは枠の中の既存の世界での自由を選んだ。かれは自由＝ものという矛盾したものになろうとする。その手段としては悪の選択しかない（BI，P.82，BE，P.76－P.80）。

A）実存的精神分析（存在投企）の視点との差違

以上の（1）から（15）までの中，存在投企の視点に立てば明らかに論理的歪曲と判断されるものが見うけられる。逆にそれらはサタンの像形成の視点をとれば，ある程度の脈絡を保ってあらわれる。しかしこれから判るように，それはある程度にすぎない。

α）まず人間の本質は自由であるという視点がある。存在投企とは無関係の純粋な超越性が普通の人間の状態であるという主張がみられる。〔(1)，(2)，(12)〕

実際，ボードレールが自由を自覚しても，この自覚が一般に単なる認識におわるのみで存在投企には何の変化もおきなかったならば，サルトルはボードレールを批判できぬだろう。また自覚があり，現実にボードレールが自由であるとしても，一般にこの自由が一時的なものでしかなく再び以前の(又は新しい)存在投企にからめとられるのならば，やはり非難は不可能だろう。

< le choix libre que l'homme fait de soi-même s'identifie absolument avec ce qu'on appelel sa destinée >. (BI, P. 245, BE, P. 224)

と，一般論を提出し，かつ詩人を咎めうるためには純粋な超越性だけを人間の現象学的本質と少なくともしなければならない。

さらにこの自由はロカンタンが発見自覚するごとき非人称であっても単に消極的で無気力な自由であってはならないだろう。[3] つまり状況をたえず乗りこえうる積極的な自由の面をも持つ必要があろう。そうでなければ（1）の論拠は成立しないからである。

β）次には，詩人の創造力を生得のものとする視点がある〔(3)，(5)，(8)〕。すなわちボードレールにおいて最も重要な特性をそれ以上還元不可能な実体同然とみなしている。実存的精神分析の視点から言えば，まさにこれこそ説明されなければいけないものである。したがってサルトルは，ボードレール論において，実存的精神分析の概要で非難したブールジェと同じことを，この創造力解釈において犯している。

γ）第三に創造と自由との同一視〔(4)，(10)，(15)〕。存在投企の視点からはいかなる創造も自己所有をめざし，存在投企の手段であった。このとき自由

は即自対自によって言わばひきよせられている。サルトルは，しかし，この同一視で，創造を自己所有と切り離し，創造行為の主体性に力点をおいて，創造と純粋な超越性とを主体性を軸にすりかえている。この同一視が客観的に詭弁であるのは明らかだろう。創造とは少なくとも何かを行為の結果として持つことである。その意味では労働と等価におけるかもしれない。しかし，すべての主体的な行為が労働ないし創造であるはずがない。

δ）最後に，創造行為は自己把握を象徴的にさえ満たさないがゆえに，一般に人間は創造行為を自己所有のために行なわない，という視点がある〔(9)〕。
実存的精神分析の立場からは，客観的に自己所有は不可能であろうと，やはり投企はされるのである。それが象徴的満足の役割を果たすことはすでにみた。

B）サタン像の形成

α）β）γ）δ）で指摘したものが，自由自覚からサタン像形成に渡る歩みの中で，存在投企の考えに抵触する視点である。

では具体的にサタンの像は，これらの視点のどれをもとに，どのように生成されるのか。メビウスの輪の捩れの転回点とは何だろうか。それに答えるためには，ボードレールが準えられるサタンの弁別的特性が質ねられなければならない。

サタンとは神の善世界の中で気ままな悪行を楽しむすねて不従順な子供（enfants désobéssants et boudeurs）の象徴であった。まず子供に擬せられるわけは，子供が両親の権威を認め従順であり，主体性のない，その代りに責任も大人に委ねた存在だからであろう（受動性，非責任性）。けれどもこの子供に「すねた不従順な」という形容詞が付されるのは，責任は神に委ねながらも，自分勝手な悪行を楽しむという属性がサタンにおいて加わるからであろう。さらには子供が軽蔑的な比喩としてサタンという大人に用いられている事実に注目すれば，サタンとは，受動性，限定された自由，責任放棄の性格を本質としてもつはずである。

1）限定された自由－責任放棄

便宜上，詩人の限定された自由がどう導出されるかを，まず考察したい。

本章の自由自覚からサタンへの経緯の要約で見られる（14）の叙述は二章の（5）の段階に対応する。そこには次の文がある。

il s'agit toujours, au fond, du même effort constant de récupération.
(BI, P. 83, BE, P. 77)

[...] assimiler la *chose* à une libre conscience. (BI, P. 84, BE, P. 77)

存在投企の視点からは，自由と対他存在との総合化と解すべき（二章）この行為は，すりかえられて制限された（責任しか持たぬ）自由の享受となる：

De même qu'il s'est arrangé pour conquérir une solitude accompagnée et consacrée, de même il tente de se donner une liberté à responsabilité limitée. [...] Il fuit cette vérité redoutable que la liberté n'est bornée que par elle-même, et il cherche à la contenir dans des cadres extérieurs.
(BI, P. 84, BE, P. 78)

この詭弁はサルトルが挾む次のパラグラフによってこそ成立する：

On ne se possède que si l'on se crée et si on se crée, on s'échappe: on ne possède jamais qu'une *chose*:（以上前半）

Mais si l'on est chose dans le monde, on perd cette liberté créatrice qui est le fondement de l'appropriation.（後半）
(BI, P. 84, BE, P. 77)

前半は創造による自己把握は不可能という視点に立っている。この主張自体は存在投企の理論と矛盾しない。 詭弁は後半に存在する。前半で ≪On ne possède jamais qu'une chose≫ というとき，所有者(on)と所有物(chose)の両者の存在が前提されている。従って，たとえ自己所有が果せなくとも，所有者が完全に所有物となる体の ≪mais si l'on est chose dans le monde≫ という仮定は成立しえないだろう。

具体的に扱った場合，前半の行為は第二章の(4)の段階，他人の視線による自己の構成に対応する。よって実際には他人の証言と反省との同時的な活用である（二章），このとき私という主体は，たとえ対他存在の面をもったとしても決して純粋な ≪chose≫ になるわけではない。いや，なることが可能ではない，というべきである。

なぜなら大体が前半の文脈においては詩人は自己所有に努めているのである。

ゆえに他人の視線との同一化で，自己であるはずの「悪人」をものとしてしか認めえないとしても，かれの指向性は，あくまで自分を発見する方向にある。したがって反発をそれにおぼえるわけもなく，次のごとく ≪orgueil≫ が登場する根拠もない。

[...] son orqueil ne saurait se satisfaire d'une originalité passivement acceptée et dont il ne soit pas l'auteur. (BI, P. 83, BE, P. 77)

サルトルの議論は，このように，悪人という「もの」であることにボードレールが反発し，自由を主張するという仕組みからなる。分析すれば次のようになる。前半では存在投企する自由が扱われている。後半では，この自由が「創造的自由」と言い直される。そして「所有化の基礎」であると付加することでかつ「もの」と対峙させられることで，創造的自由は自由と等価となり，創造的という形容詞が力を失う。つまり，存在投企もしうる純粋な自由が出現するのである。

このすりかえのあと，自由を主張する詩人は完全な自由を恐れるがゆえに，制限された自由を求めるという主張がなされるのである。この存在投企の姿から自由を欲する姿への屈折がそれほど奇異の感を与えぬのは，自己創造と自由とを「創造的自由」によって等価に置くからであり，ここでは (α) を前提にして，創造＝自由という式 (γ) が利用されている。また実際，このすりかえに続く以下の二文は同じ事実を指そうとしているのだろう：

Il veut être libre, sans doute mais libre dans le cadre d'un univers tout fait. (BI, P. 84, BE, P. 77)

Il veut se créer lui-même, sans doute, mais tel que les autres le voient. (BI, P. 84, BE, P. 77)

2) 幼児性－受動性

ボードレール論において，一般に子供は両親を神とみなすとされる。

L'enfant tient ses parents pour des Dieux. Leurs actes comme leurs jugements sont des absolus. (BI, P. 63, BE, P. 59)

ボードレールは，この両親＝神に対応する断罪者を求め，その視線によって自己の本質を構成され，幼児の安逸さを楽しもうとした，というのがサルトルの主張である。

まず比喩の水準で考えても，このように他人を神とする指向が，存在投企（神，世界の我有化の企て）と逆行するのは疑いを容れない。

かつ二章で示唆したごとく，サルトルはこの詩人の態度をマゾヒズムと断定する：

[...] et n'est-il pas nécessairement masochiste dans la mesure où son besoin de consécration le conduit à rechercher d'être un objet pour de grandes consciences sévères? (BI, P. 69, BE, P. 65)

これは第一にサルトルによるマゾヒズムの定義であり（一章　§2），従って，第二に実存的精神分析に矛盾しているということができる。

それだけではない。このマゾヒズムの行為をサルトルは (objet) である状態そのものと同一視する。すなわち完全な受動性とする。そしてマゾヒズムすなわち完全なものであることに詩人が反発をおぼえ，自由を主張するという理屈にしている（二章 (5) の段階，本章要約 (14)）。

たとえマゾヒズムの目標が自己の超越性を消し完全な即自になろうという意志であれ，マゾヒズムの行為自体は主体的なものであろう。実際，ボードレール論においては，詩人が自ら断罪者を求めたことになっている：

Sans doute, faute de pouvoir atteindre en lui ce qui le rend irremplaçable, s'est-il adressé aux autres et leur a-t-il demandé de le consituer autre par leurs jugements. (BI, P. 83, BE, P. 77)

『存在と無』においてマゾヒズムの挫折とはまさにこの主体性に根ざしている：

C'est dans et par sa transcendance qu'il se dispose comme un être à transcender; [...]. (EN, P. 447)

かくサルトルはボードレールを幼児にたとえ，マゾヒストとすることで実存的精神分析に抵触している。かつ制限された自由を導くために，マゾヒストの態度と，その目標とをすりかえている。

以上1)，2)で示したように，サタンの像の生成は，存在投企の視点とは異なった視点によってなされている。また同時に論理的な詭弁も用いられている。まずボードレールはマゾヒストとされる（存在投企の視点と異なる）。次に人間の本質は投企と無関係の自由（純粋な超越性）とされる（同様に異なる）。最後にマゾヒズムは，この自由と対立させられ得るために，完全な受動性とされる（詭弁）。同様な意図において，人間の自由性を前提に，創造と自由が等価とみなされる（存在投企と異なる視点であり，かつ詭弁）。

C) サタン像による存在投企の像の包摂

ボードレールは自由であり，その自覚をもつとすること，その上で，創造は差違性を叶えさせぬが故に，かれは日常生活の中に独自性所有を求めたとすること（本章A要約(9)）。この議論がサタン像に存在投企のそれを取りこむ下地である。なぜならこの場合，詩人は自由でありながらも，自ら進んで存在投企する姿となるからである。さらに詩人が制限された自由を欲するとするとき，かれは自由でありかつ同時に存在投企する人間となる。すなわち，存在投企が常に自由に支えられていることが強調される。また自由は創造と等しく，マゾヒズムと呼応する制限された自由は，制限された創造に等しく扱かわれる。よってボードレールは，きままな自由を楽しむ者のみならず，二流の創造者となる。即ち，独自性は神から離れて二流のニュアンスをおび，詩も二流の創造となる。

まず二流の創造者として描かれる例を挙げる：

> En un certain sens il crée: il fait apparaître, dans un univers où chaque élément se sacrifie pour concourir à la grandeur de l'ensemble, la singularité, clest-à-dire la rébellion d'un fragment, d'un détail. (BI, P. 89, BE, P. 82)

> [...]: ses poèmes sont comme des succédanés de la création du Bien, [...] Ce sont en quelque sorte des produits de remplacement, chacun représente l'assouvissement symbolique d'un désir de totale autonomie, d'une soif de création démiurgique. (BI, P. 86, BE, P. 79–P. 80)

次に，詩人の独自性所有とは最終的にマゾヒズムを手段とし，このマゾヒズムは詭弁によって完全な受動性，「もの」とされる。かつこの「もの」に詩人の意識は一致しようとし，同時に制限された自由のこの「もの」への反発が示される。また自由とは創造である。よって詩人は独自性所有をめざして「もの」となる一方，自由

と創造力を味わうという共時的に分裂した不誠実な姿をとる：

> Il pèche en *public* et pendant qu'il connait l'atroce sécurité d'être mué en objet par la condamnation morale qu'il mérite, il éprouve la fierté de se sentir créateur et libre. (BI, P. 93, BE, P. 86)

またこの共時的分裂は，通時的分裂に変換され，「もの」と「自由」との両項の戯れは，即自と対自という存在投企の視点での関係と重ねあわされる：

> Baudelaire ne peut ni ne veut vivre *l'être* et *l'existence* jusqu'au bout. A peine s'est-il laissé aller à l'un des deux partis qu'il se réfugie aussitôt dans l'autre. Se sent-il objet — et objet coupable — aux yeux des juges qu'il s'est donnés, il affirme aussitôt contre eux sa liberté [...].
> (BI, P. 98, BE, P. 90–P. 91)

次には，この共時と通時の分裂の合成：

> Parce qu'il a voulu à la fois être et exister, parce qu'il fuit sans relâche l'existence dans l'être et l'être dans l'existence [...].
> (BI, P. 99, BE, P. 91)

何度も繰り返したように存在投企の視点からいえば，(l'existence) は (l'être) を追いかけて合体をはかるのであり，共通的に (l'existence) が (l'être) に反発をおぼ自己主張したり通時的に (l'existence) が消滅して (l'être) がそれに交替する事態は成立しないのである。

この分裂を構成することで，サルトルは詩人の存在投企，即自と対自の複合化自体をどっちつかずの自己偽瞞的な戯れの姿に歪曲する。実際，この分裂そのものをサルトルは存在投企と呼ぶ：

> Le choix que nous avons décrit, ce balancement perpétuel entre le existence et l'être [...]. (BI, P. 125, BE, P. 115)

または，独自性が叶えられぬことを知ってその不満足さを自己の目的としたとする：

Or elle (cette étrange image de lui-même 註筆者) est hors de prise [...]: il croit l'atteindre et il la frôle, mais quand il veut l'étreindre, elle s'évanouit. Il voudra donc se persuader à lui-même [...] que l'effleurement furtif est la véritable appropriation [...].
C'est ce frôlement irritant qu'il recherchera dans tous les domaines pour se prouver que c'est la seule possession souhaitable.

(BI, P. 239, BE, P. 218)

そしてこの態度によって詩人は自らの生をサタンのそれとしたとなる：

[...] elle (cette vie 註筆者) représente l'insatisfaction radicale de Dieu déchu. (BI, P. 239, BE, P. 218)

以上の如く，サルトルは到る所で，神を予想させる存在投企の像を，存在投企と異なる視点を使い詭弁を弄してサタンの否定的像の内部に合成させるのである。

さらに，たとえ挫折の歴史であれ，一つの高みに至る経験の印象を与える詩人の独自性の弁証法を，サルトルはあたかも存在しないかに印象づける。

il a refusé l'expérience, rien n'est venu du dehors le changer et il n'a rien appris. (BI, P. 245, BE, P. 223)

第 四 章

第二，第三章を見渡せば了解されるように，詩人の全体像は分裂し，矛盾する視点から描かれている。その視点の第一のものは，人間の本質を存在投企するかぎりでの自由，とする系から発し，少なくともあらゆる創造を自己所有，主観の客体化をめざすものとする。第二のものは，人間の本質を純粋な超越性のかぎりでの自由とする系から発し，創造を自由と等価とする。しかし，あらゆる人間は自由であり，自由が創造であるなら，あらゆる人間が創造力をもつと結論せざるをえないだろう。そのときボードレールを創造的人間と特殊化する行為は，何の成果ももっていないことになる。またこの第二の視点には，ボードレールの創造力を生得のものとする判断が含まれていた。この生物学的な創造力の解釈は，創造力をあた

かも実体の如くみなすのであって，意識の透明さを主張する自由の概念と矛盾する。したがってサタン像を構成する第二の視点内部が，それ自体破綻をきたしている。さらにこの視点は，制限された自由をひきだすために，自由を創造とする以外に，マゾヒズムを純粋な受動性とすりかえる。そして，このマゾヒズム(即自への企て)を持ちだすこと自体，第一の存在投企の視点に抵触し，存在投企の視点を介して，第二の視点の自由性との矛盾が予想されるものである。

このように対立し，かつその対立項の片方の内部もまた矛盾している全体を大きく三つに分割するとき，ボードレール像のグローバルな姿がとらえられる。この場合，メビウスの輪の比喩よりも，現実にはありえない三面体のそれの方が適切であろう。すなわち，ボードレール像の全体は，存在投企の面，マゾヒズムの面，自由（純粋な超越性）の面によって構成されていると言いかえることができる。なぜならサタンの姿とは，いわば主体的受動性とも表しうる矛盾した性格をもち，自由であり，それを欲しつつもマゾヒストとして存在投企するパラドクサルなものだからである。

今まで述べた矛盾にもかかわらず，この三つの面をサルトルが強引に複合させようとするとき，この詩人像は決して現実の詩人の写してはないだろう。この三面のうち，たとえばマゾヒズムが現実の詩人にあろうとなかろうと問題ではない。またマゾヒズムがサディズムと実際には結びついていたか否かもどちらでもよいことである。事実の選択，その表出自体が主体の世界開示をあらわすがゆえに，何らかの指向性に裏づけられているという固い立場に立たずとも，マゾヒズムを『存在と無』の文脈で (objet) への企てとする限り，このマゾヒズムの面はすでに一つの解釈である。さらに，このマゾヒズムは，他の三面との矛盾対立にもかかわらず，一つの像の複合に向かって強い指向性により支えられているはずである。そうでなければこの相矛盾する三項の戯れは成立せず，それぞれが互いに反発しあって分解し，無意味の中に廃棄せざるをえないだろう。マゾヒズムの面を支え，この戯れを継持しているのはサルトルである。

従って，第一章の分析を想起するなら，すでに明瞭なことだが，ボードレール像の分裂とは，「存在と無」の分裂の写しである。

しかしそれだけではない。この理論的投影は，個人的水準の投影でもある。

まず存在投企する人間とは，『嘔吐』のロカンタンのように文学によって救済を願うサルトル自身の企てを意味している。この事実はサルトルの自伝『言葉』[1)]に

よって確かめられる。若い頃のサルトルにとり，本とは作者の主観性の客体化，すなわち即自対自に対応している：

A mes yeux, ils (les écrivains 註筆者) n'étaient pas morts, enfin, pas tout à fait: ils s'étaient métamorphosés en livres [...] Voilà pour les corps: quant aux âmes, elles hantaient les œuvres. (M, P. 50)

また諸物の構成する世界を名づけるとは，それらを我有化することであり，作品とは世界の所有につらなるだろう：

Je m'ébattais dans un minuscule sanctuaire, entouré de monuments tropus, antiques, qui m'avaient vu naître, qui me verraient mourir et dont la permanence me garantissait un avenir aussi calme que le passé.
(M, P. 30)

このような作品とは堅固な石のごとき存在 [≪Ces pierres levées≫ (M. P.29); ≪cette substance incorruptible: le texte≫ (M. P.152)] であり，死をこえて通時的にも持続するだろう：

[...] Je regardais mon sixième symbolique, j'y respirais de nouveau l'air raréfié des Belles-Lettres, l'Univers s'étageait à mes pieds et toute chose humblement sollicitait un nom, le lui donner c'était à la fois la créer et la prendre. Sans cette illusion capitale, je n'eusse jamais écrit. (M, P. 47)

さらに作品になった私の主観は共時的にも普遍化する：

[...] je suis un grand fétiche maniable et terrible. [...] je n'existe plus nulle part.
je *suis* enfin ! je suis partout [...]. (M, P. 162)

主観の客体（もの）化，世界所有，永遠にしてかつ遍在する作品とは，『存在と無』の自由＝対自，まさに神に他ならないであろう。さらに作品になるとは虚しくないにしろ一つの受難である：

[...] je fus préparé de bonne heure à traiter le professorat comme un sacerdoce et la littérature comme une passion. (M, P. 33)

このように『存在と無』の客観性がどのようであれ，その理論の核にはサルトル個人の思想体験があるのは明らかである。[2)]

次に人間を純粋な超越性と本質づける視点は，サルトルの捕虜生活において生じた連帯の重要性の自覚に帰せられる。『存在と無』が，この視点と存在投企のそれとに分裂しているのは，執筆期間が，連帯自覚の前後に及ぶからである。[3)] すなわち，純粋な超越性と人間を把える視点は，サルトルの社会参加の意志に対応する。なぜならこのとき人間は世界に対して責任があるからである。

≪contre tous ceux qui ont souhaité de libérer ces hommes, contre George Sand, contre Hugo, il a pris le parti de ses bourreaux [...].
(BI, P. 58, BE, P. 55)≫

と，非難するサルトルの視点は，人間を自由とし，文学による社会参加を意志するそれである。そして死刑吏に加担し，そのモラルを受けいれた詩人とは，自由を恐れ，かつ独自性を享受できぬがゆえに，新しいモラルを創造しなかった人間とされている。つまり，自由，新しいモラルとは，独自性，既成モラルとひきかえられたのである。従って，サルトルの非難とは社会参加，自由の立場に立った，存在投企への弾刻である。文学的アンガージュマンの見地に身をおいた，かれ自身の自己中心的な文学による独自性所有への指弾である。

したがって，ボードレール像には，ディドロのセネカに対するごとく，[4)] 意識の二重化が少なくとも一つある。対象に同一化する意識と，それらをとらえる意識。ただサルトルにおいてなされるのは捨てさろうとする自己との同一化であり，自己弁護でも良心の自己検討でもなく，両価的な自己非難の意識である。

この意味では，サルトルは『ボードレール』に「自ら破棄しようとする即自的選択を投影した」[5)] という阿部良雄氏の指摘は肝心なところを窺っている。

最後にマゾヒズムもサルトル自身の個人的傾向を示している。ただ単に一般的に人間にみられる態度であるから強引に『存在と無』の考察に嵌めこまれたと判断するのは正しくないだろう。このテーマは，受動性，苦悩主義，挫折，負けるが勝ちのテーマと群をなして，サルトルの作品に頻出する。

引用は省くが，『ボードレール』以外の批評では，まずGenet論[6)]をとる。この

作品で，悪人として規定されるジュネの受動性（P.27），そこに由来する女性的原理（P.77）はマゾヒズムに連なる。そしてこの原理と男性的原理とは挫折をもたらす（P.390）。かつこの挫折は文学的勝利に通ずるが故に，一種の負けるが勝ちであろう。おなじようにフローベール論[7]において，家族の中でフローベールが身につける受動性（一冊目，P.42，P.48，P.151）は老いと係り（一冊目，P.199）マゾヒズムを生む（一冊目，P.853）大きな要素である。また受動性と結びついたフローベールのポンレヴェクにおける神経症の発作は，負けるが勝ちの挫折の企て（二冊目，P.2084）である。勝利とは文学のそれをさす。

以上の二例は，最終的には文学的勝利と結びついたマゾヒズムであり挫折である。これとサルトルの自伝に述べられた文学を殉教とする視点は対応する。さて，『言葉』でサルトル自身は自分のマゾヒズムを否認する次の文を記している

> L'enchaînement paraît clair: féminisé par la tendresse maternelle, affadi par l'absence du rude Moise qui m'avait engendré, infatué par l'adoration de mon grand-père, j'étais pur objet, voué par excellence au masochisme si seulement j'avais pu croire à la comédie familiale. Mais non; [...] je me jetai dans l'orgueil et le sadisme, autrement dit dans la générosité. (M, P. 92)

≪générosité≫とは作家を指すが，この一見現実に反した仮定文と映る叙述は，少なくともサルトルの意識の揺らぎをあらわしている。かれは≪j'aurais été pur objet≫とは言わず，≪j'étais≫と半過去で記す。従って，（≪si seulement j'avais pu croire≫ 云々という文章は，≪voué par excellence au masochisme≫のみに掛かると文法的には解釈できそうである。しかし≪féminisé≫された≪pur objet≫であった（半過去）事実と，≪Voué par excellence au masochisme≫の状態とは同一のことを指すと考えるのが論理的である。実際読み下したとき≪j'étais pur objet, voué≫と続けて意味をとるのが正常であろう。よって，サルトルは≪si seulement≫以下を付け足したと判断するのが穏当である。つまりかれは自己のマゾヒズムを認め，かつ認めていない。

換言すれば，サルトルのマゾヒズムとは意識のかなり深い所にあるということである。

いずれにせよ，この文が，マゾヒストであり，かつそれに対して創作を行なうという脈絡になるからには，サルトル自身に文学による殉教と連結するマゾヒズムが，

存在すると，はっきり断言しうる。

したがって，ボードレールがマゾヒストとして存在投企する姿を描いたとき，このマゾヒズムは即自への企てとして解釈され，理性化されているにせよ，サルトル自身の文学による存在投企と重なっているはずである。すなわち存在投企の否定性とは，マゾヒズムの否定性である。

ここで輪は完結する。

ボードレールに文学による存在投企を投影して，それを非難するサルトルとは，ボードレールにマゾヒズムを投影して，それを非難するサルトルでもある。そして自己非難が一面的にはマゾヒズムであることを想起すれば，サルトルは『ボードレール』を描くこと自体に，自己のマゾヒズムを表出しているといえるかもしれない。

以上がサルトルとボードレール像との関係である。

結　　論

ボードレールは局所的に実存的精神分析の適用である。その理論と方法論を，ある面であてはめて成り立っている。しかし状況からくるサルトルの関心は，文学による社会参加に据えられており，その限りで，詩人の創造力には及んでいない。もしもボードレールの詩人という最大の特徴を，実存的精神分析に完全に沿って描くならば，現実，想像界，詩作というジュネ論，フローベール論の構成を辿ったはずである。しかしそれは同時に文学による自我所有を美化する道でもあった。従って彼は，詩人の創造力を天分とする。かつ人間は自由であると唱え，文学による社会参加を訴えるとき，創造力は自我所有と切り離されねばならなかった。自由と同じ場に置かれる必要があった。

にもかかわらず，実存的精神分析の視点で詩人像を描くことは，必然的に自己を映す営為であり，自己の否定的な相（文学による救済，マゾヒズム）を射影として浮かばせることであった。ゆえに同一化し，かつ指弾し，さらに恐らくはメタレヴェルでマゾヒズムを享受するサルトルが出現する。

この作品は，したがって，端から分裂が予想されるものである。サルトル自身，この作品を≪Très insuffisante, extrêmement mauvaise≫ (*Situation IX*. 1972, P. 113) とみなす。その理由は，了解されるように，単にこの作品に，≪l'étude

psychanalytique qui eût expliqué Baudelaire à partir de son corps et des faits de son histoire ≫ が欠けていたからではない。同様に，単にサルトルが ≪la fécondité de l'idée dialectique et du matérialisme marxiste ≫ (Beauvoir, *La force des choses 1*, Gallimard, folio, p. 69) を理解するに遠かったゆえでもないだろう。

しかし，一体サルトルはこの分裂を意識していたのだろうか。一方で人間は神への受難だと書き，他方で人間は自由の超越性と記す矛盾は自覚されていなかったのだろうか。

それは判らない。が，たとえ自覚していたにしろ，この分裂に正面から対してないことだけは確かである。分裂を止揚する意志はなく，この分裂の戯れを利用している。この分裂にまともに当るとき，彼は人生を責任の重圧からある意味で解放し下のように解するに到るだろう：

> Il y a des vies qui brûlent comme du nylon, d'autres comme des bougies, d'autres comme un charbon qui s'éteint doucement sous la cendre. Ce qui compte, en tout cas, pour celles qui sont diachroniquement significatives en tant que rétotalisantes, c'est que, courtes ou longues, rapides ou lentes, elle sont l'époque elle-même, d'un bout à l'autre, ramassée dans un programme. (*L'Idiot de la famille* P. 443)

だがおそらくは基本的主張に変りはない。

> [...] l'important n'est pas ce qu'on a fait de nous mais ce que nous faison nous-même de ce qu'on a fait de nous. (*Saint Genet* P. 63)

註

序

1) J.-P. Sartre, *Baudelaire*, coll, ≪Les Essais ≫, n° XXIV, Gallimard, 1947，略号以下 BE。

1944 年に執筆。断片的に雑誌に掲載。まとまった形としては次著に序文として初出：

Baudelaire, *Ecrits intimes,* Edition du Point du Jour, 1946.

なおGallimardのIdées 叢書（1963，略号以下 BI）に加えられている。本稿では便宜上 BE，BI 両版のページを引用文の最後に記す。

cf: Michel Conta, Michel Rybalka, *Les Ecrits de Sartre,* Gallimard, 1970, P. 142, P. 154.

2) ≪La psychanalyse existentielle≫
cf: Sartre, *L'être et le néant* Gallimard, 1943（『存在と無』略号以下 EN) P. 643–P. 708.

3) a) Jean Le Galliot, *Psychanalyse et langages littéraires,* Fernard Nathan, 1977, P. 157–P. 168.

b) Benjamin Suhl, *Sartre, un philosophe critique littéraire,* Editions Universitaires, 1971, P. 123–P. 143.

c) Michel Sicard, *la critique littéraire de Jean–Paul Sartre,* 1 objets et thèmes, Minard, 1976, P. 13–P. 14.

d) Otto Hahn, ≪Sartre's litterary Criticism≫, *Sartre, A collection of Critical Essays,* Anchor Books Edition, New York, 1971, P. 225–P. 230.

e) Hazel, E. Barnes, *Sartre,* Quartet Books, London, 1973, P. 137.

4) ≪Or il est de fait que malgré sa haute maîtrise cette étude n'emporte pas l'adhésion du lecteur. Elle l'irrite même, le cabre. C'est que la démonstration de psychanalyse existentielle s'y convertit naturellement en un réquisitoire abusif≫
George Blin, *Le Sadisme de Baudelaire* Librairie José Corti, 1948, P. 123.

『ボードレール』に感性的理性的に反発をおぼえるからこそ上記の研究者の何人かが言及するように，Blin を含めていくつもの直接ないし間接の反論がなされたといえよう。

cf: Georges Bataille, ≪Baudelaire ≫, *La Littérature et le Mal,* coll, ≪idée ≫, Gallimard, 1957, P. 37–P. 68.

Maurice Blanchot, ≪L'échec de Baudelaire≫, *La Part du Feu,* Gallimard, 1949, P. 137–P. 156.

Michel Butor, *Histoire extraordinaire, essai sur un rêve de Baudelaire,* Gallimard, 1961（本書にはサルトル批判ととれる叙述が散見される）

5) 実存的精神分析の理論は J. Hyppolite も言うごとく（ cf: *Figures de la pensée philosophique II*, P.U.F. P. 781 ），『存在と無』全体の目的とも解せられ，存在論全体を前提している。しかし，この存在論自体に分裂が見られる（一章参照。なおこのことを私はすでに二度に渡って示した。 cf ：京都大学仏文科修士論文： *signification de ≪Saint Genet≫ pour Sartre* ：京都大学仏文研究室発行，『仏文研究 Ⅶ』所収，「嘔吐」論）。したがって実存的精神分析は『存在と無』の主要を占める一つの体系にのっとっているというべきである。そしてこの体系が人間存在をどのようにとらえているかは有名な次の表現で直観的に了解されるだろう：

> Chaque réalité humaine est à la fois projet direct de métamorphoser son propre Pour-soi en En-soi et projet d'appropriation du monde comme totalité d'être-en-soi, sous les espèces d'une qualité fondamentale. Toute réalité humaine est une passion, en ce qu'elle projette de ce perdre pour fonder l'être et pour constituer du même corp l'En-soi qui échappe à la contingeance en étant son propre fondement, l'*Ens causa sui* que les religions nomment Dieu. Ainsi la passion de l'homme est-elle inverse de celle de Christ, car l'homme se perd en tant qu'homme pour que Dieu naisse. Mais l'idée de Dieu est contradictoire et nous nous perdons en vain: l'homme est une passion inutile ≫. (EN, P. 708)

第 一 章

§1

1) この考えは次著に根本的な形ですでに述べられている：

Sartre, *La Transcendance de l'Ego,* Librairie philosophique, Vrin, 1965

この研究は1934年に書かれている。

cf: *Les Ecrits de Sartre,* op. cit P. 56

2) Valeur（価値）と即自かつ対自存在とは同じものを指す。cf：EN P. 528

3) 個々の欲求行為がそれ自体で即自対自投企の手段であるのか，又は二次的手段としてのみ考えられるのか，その両義性については後述。

4) これは欲求行為が存在投企に還元しうる故に実体ではないという意見である。しかし人間を対自と見，意識すなわち無だと判断したときも，欲望行為は実体ではないという主張が生まれるだろう。

5) 分析的方法に対する批判はプルーストにふれて他の部分でも展開されている。
(EN, P. 216–P. 217)

6) たとえば Adler:

> By starting with the assumption of the unity of the individual, an attempt is made to obtain a picture of this, unified personality regarded as a variant of individual life-manifestations and forms of expression (*The Practice and theory of Individual Psychology,* Translated by P. Radin, Routledge and Kegan Paul L. T. D., 1955, P. 2).

Adler とサルトルの人間観の多くの点における共通性はアンリ，エレンベンカーも言及している。

cf：木村敏，中井久夫監訳，『無意識の発見』，弘文堂，昭和55年，P. 268.

7) このように実存的精神分析の説明個所においては，どのような欲求（またはその表現である行為）でさえ，存在投企の直接の手段としてとらえられている。あることをなすのが，所有という迂路を経るとしても，なすことは同時に所有であるが故に，直接存在投企を意味する。次の行文がこのことを証するだろう：

> Ainsi ma liberté est-elle choix d'être Dieu et tous mes actes, tous mes projets, tranduisent ce choix et le reflètent de mille et mille manières, car il est une infinité de manières d'être et de manières d'avoir.
> (EN, P. 689)

この場合，瞬間瞬間の行為が存在投企をそのまま象徴することになる。しかし他の個所で，各行為は最終的な根源的投企を達成するための二次的なものとして性格づけられる，と解しうる叙述がある：

> [...] que toute action, si insignifiante soit-elle [...] s'intègre, [...] comme une structure secondaire dans des structures globales et finalement dans la totalité que je suis. (EN, P. 536)

ここには存在投企と一つの行動との空間的ないし時間的比喩による隔たりが感ぜられる。あるいはまた次のような表現がみられる：

> [...] mon ultime et totale possibilité comme intégration originelle de tous mes possibles singuliers [...]. (EN, P. 539)

この文でも同様に，個々の可能性が存在投企そのものと一対一に対置されているとは取りにくいだろう。

実際われわれにとっては，どんなささいな行為でも存在投企の直接的手段であるとは考えがたい。道を歩いていて躓くとする。起きあがる行為が存在投企の象徴とは言えぬだろう。

以上の両義性を解くためにはサルトルの用いる acte や action, conduite の差違を明らかにすべきだろうか。その必要はないと言える。両義性は，実践的な実存的精神分析の伝記への応用（たとえばボードレール論）をするうえでは問題にならないであろう。伝記の場合，対象のもつ特徴的なテーマ，ないし重大とみなされる行為や事件のみが扱われ，それらは存在投企と密接に係ると判断されるはずのものだからである。

§2

1) Mary Warnock の漠とした疑問はこの点から発している：

> But it is not clear whether Sartre's theory could ever be applied, nor whether it is, as it was meant to be, therapeutic.
> (*The Philosophy of Sartre,* Hutcinson University Library, London, 1965, P. 127)

2）次の記述がある：

> Nous ne sommes *nous* qu'aux yeux des autres; et c'est à partir du regard des autre que nous nous assumons comme nous. Mais ceci implique qu'il puisse exister un projet abstrait et irréalisable du pour-soi vers une totalisation absolue de lui-même et de *tous* les autres. Cet effort de récupération de la totalité humaine ne peut avoir lieu sans poser l'existence d'un tiers [. . .]; ce concept (このような tiers 筆者註) ne fait qu'un avec ceci de l'être-regardant qui ne peut jamais être regardé, c'est-à-dire avec l'idée de Dieu,

すなわち神とは目差すだけの者である。目差しは，ところで，他人を即自化して自己の目的の為にのりこえるための手段である。したがって神は，目差されるという受動性ではなく，主体性によってのみ規定されるだろう。

このことは，神を即自＝対自とする考えに矛盾するかもしれない。しかし矛盾しているのはサルトルである。この矛盾はサルトルの神概念が，「実体」ないし「本質」ととらえただけでは失われてしまう独自性をそなえている事実からくる。いうまでもなく即自＝対自ないし神の考えは，西洋精神史ないし神学，哲学史の中に位置づけられる。したがって，サルトルのその考えが，デカルトやプラトン主義の影響の下にあるのも確かであり（デカルトとプラトンの思想の違いは別にして），即自＝対自ないし神は，サルトルの中で，「本質」であり「実体」であろう。この事実は，ジュネ論や『自我の超越』をひきあいに出さなくても認めなければならない。しかしそのことだけを強調するとき，サルトルの神が敵対的対他関係を前提にして存立しているという独自的面を見逃すことになろう。『存在と無』の神は，汝の隣人を愛せよの神ではない。また抽象的な「本質」「実体」と等価に置きうる神でもない。

3） *A propos de Sartre et de l'amour.* (Grasset, 1967, P. 30)
この名著は，サルトルのマゾヒズムについて詳しく言及している。

第 三 章

1）サタン像が存在投企の像を包んで，全体としての像が翳りをおびることは，後に述べるが，詩人が自由を自覚する部分は，明瞭に，存在投企の像とサタン像と

の合成である。つまり，サルトルは，ボードレールのアンニュイ，徒労感，自殺の意図，遊戯，なまけ癖，断続的な行動，深淵，不満足などのテーマを，独自性所有の根源的投企に還元せず，自由の自覚に還元する。

2) 不完全なのは，存在投企は人間の現象学的本質であると言明しているからである。この一般論を，人間の本質を自由とするサタン像で完全に包むことは不可能である。

3) ≪Voici ce qu'il y a: des murs, et entre les murs, une petite transparence vivante et impersonelle. La conscience existe comme un arbre, comme un brin d'herbe. Elle somnole, elle s'ennuie.≫
(*Nausée*, Gallimard, 1938, P. 212)

第 四 章

1) *Les Mots*, Gallimard, 1964.
以下略号 M。

2) それゆえにこそ『嘔吐』の世界を『存在と無』の存在投企の視点から，かなり整合的に分析できるのである。
cf：拙論「嘔吐論」（既出）

3) このことは≪*signification de ≪Saint Genet pour≫ Sartre*≫，「嘔吐論」で『存在と無』の分裂にふれた際述べた。『存在と無』の構想は1933年にさかのぼり，連帯自覚が1940年，出版が1943年である。 なお，文学の社会参加を唱導する ≪Qu'est ce que la littérature ?≫ (*Situation II*, Gallimard) は，1947年発表である。
cf: *Les Ecrits de Sartre*, op. cit. P. 160.

4) 中川久定『ディドロの『セネカ論』』岩波書店，1980，P. 178，P. 179，P. 186，P. 187，P. 289。

5) 次の脈絡で書かれている：

「サルトルの『ボードレール』（四七）の意義とはまさしく，そのような詩的精神史の中にではなく社会的，歴史的状況の中で自らの選択を行う主体として詩人を把える方法的可能性を導入したことにあり，ボードレールが「参加」の詩人でなかったとして非難することが不当であるとしても，その不当さにおいて，第三共和国的なボードレール像 ― 言うならば，社会秩序に対して無害なものとなることを無理矢理に選ばされた詩人の像 ― に対する痛烈な批判であった。『文学とは何か』あるいは彼の『ことば』に示される小ブルジョワ家庭の文学少年像 ― そのような少年が文学を選択することがごく自然であるのは，自分が「永遠ノ相ノ下に」価値付けられた文学のそのような価値付けを意識するまでもなく，選択してしまうほどに条件付けられているからであり，そうした条件付け装置の精巧な部分品としてのボードレールに，文学少年が自ら破棄しようとする即自的選択を投影したとしても不思議はない。」

『ユリイカ総特集ボードレール』（青土社，1973）収録「ボードレール論の系譜」

「文学少年」は誤植であろう。

6) *Saint Genet, Comédien et Martyr,* Gallimard, 1952.

7) *L'Idiot de la famille,* Gallimard, 1971, 1972.